

サークルさん、おじゃまして〜す!

(株)エクセディ商事

やりとげる隊サークル

学んだ IT の知識も活かしつつ、 現場での問題や悩みをみんなの 意見を結集して、改善していく

経営トップが主導して 社内の“IT 革命”を啓蒙、推進

エクセディ商事（本社：大阪府寝屋川市）は 1993 年 2 月、エクセディグループの一員として誕生した会社です。

(株)エクセディの EXEDY とは Excellent & Dynamic を意味し、「卓越性・力強さ」との想いを込めてつけた社名。そして同社はトルクコンバータやマニュアルクラッチなどを主に扱う自動車用駆動系の一流専門メーカーであり、世界 25 カ国に拠点を有するグローバル企業です。

その親会社であるエクセディの保安警備やメンテナンス、不動産管理、さらにはエクセディグループ関連会社の経理業務、損害保険の代理店、認証整備工場、グループ会社従業員向け福利厚生、従業員独身寮の管理など多種多様な事業の担い手となっているのがエクセディ商事です。

じつはこの会社でとても目を引くのが、今も“IT 革命”が進行していること。少々誇張した表現ではありますが、社内でそのような動きが着々と広がってきたのは間違いありません。そのしかけ人であり牽引役となっているのが、社長の山下さんです。

実例を示せば枚挙にいとまがないほどです



警備グループの詰所で会合をする「やりとげる隊サークル」。取材したこの日、集まったのは 3 名だった



代表取締役社長の
山下浩彦さん

が、たとえば新型コロナウイルス対策としては従業員の出勤時の検温結果を自動集計し、自動で責任者にメール配信する仕組みを開発。日常業務でいえば押印が必要な申請作業を、電子化によりペーパーレス化。経理面でも仕訳作業などでIT化を進め、格段に合理化をはかるといった具合です。

エクセディで人事総務部門の部門長を務め、2013年4月に常務取締役としてエクセディ商事に出向した山下さんは、昨年4月社長に就任。もともと、IT関連には強い興味があったといいます。

「ITやプログラムづくりなどには関心があり、独学でも勉強。エクセディの本社時代も従業員の個人認証システムなど様々な仕組みやプログラム開発を手がけました。今のエクセディ商事に移ってからも、ITやデジタルというものは本当はとっつきやすいものだと、いろいろな形で伝え、一緒になっていろいろなIT化を進めてきました」

社外の発表大会での受賞経験が メンバーたちのやる気と自信に

このITの活用がQCサークル活動にも様々な形で刺激と影響をもたらしているのは、いうまでもありません。

まずエクセディ商事のQCサークル活動が始まったのは2000年代後半からでした。山下さんの説明によると、エクセディ本体では製造部門を中心に昔から活発な取り組みが行われ、その活動領域の広がりに合わせてこの会社でもQCサークル活動が始まったそうです。

「エクセディでは2004年頃から事務部門などの間接系でもQCサークル活動を展開することになり、私も人事総務部門時代にはかなりガッチリとかかわりました。その後、すべ

ての関連会社でも推進する方針が打ち出され、このエクセディ商事でも活動を導入したわけです」

現在の従業員数は53名。多彩な事業を少人数で担うため一部の人は個人スキルの向上によって多能工化をはかり、複数の業務を兼務しているそうです。そしてQCサークル活動については5つの職域の5サークルが実践しており、その中で今回おじゃましたのは警備グループの「やりとげる隊サークル」です。

このサークルが担当する業務はエクセディ本社の入門監視、受付、鍵管理、巡回警備のほか、社有車やガソリンスタンドの監視、計量、駐車場管理や車両誘導、緊急時の放送対応などと多岐にわたっています。サークルの前リーダーで、社内のQCサークル活動の推進役も担う土屋さんによると、メンバーは全員参加で12名。30代から70代まで年齢層は幅広く、平均年齢は59歳とけっこう高めです。24時間、365日体制で毎日交替勤務のため、全員参加で進めるのはかなり難しいといいます。

なお前に触れた“IT革命”に関連してい



現在は不動産・企画グループに在籍しながらQCサークル活動推進事務局の役割を担う土屋雅弘さん。今も時々、「やりとげる隊」の会合の様子を見に来るといふ



エクセディ本社の構内を受け持つ警備グループの面々

うと、じつは山下さんは常務時代の2018年11月8日から、通称「IT日記」という情報を全従業員向けに50日間も毎日メール配信していました。その内容はIT、パソコンの入門編から始まり、ビジネススキル、分析スキルなどをわかりやすく紹介するもの。そのおかげで、一人ひとりの能力向上に大いに役立ったと土屋さんが教えてくれました。

「私も含めて“やりとげる隊”のメンバーは毎朝IT日記を見て、時には練習問題もあったので頑張りました。その基礎知識を使い、このサークルでも従来にはなかった発想でITを活かした改善をすることができました」

一例として、「緊急時の初動対応の向上」という事例があります。これは火災報知器の発報時に、適切な操作と全館放送をする際の問題点をテーマとした活動。警備員の緊急対応への経験不足によって失敗やばらつきがあり、その問題解決をはかったのです。

この活動では誰もが的確な放送をできるようにするため、Excelを活用してユニークな全館放送音程表を作成。見ると、まるでカラオケのガイドボーカルのように動きます。これにより全隊員のスキルアップも達成。この事例は社外大会である2020年1月のQCサークル近畿支部大阪・近畿南地区「チャンピオン大会イン大阪」でも発表し、優秀賞を受賞。土屋さんは、「メンバーたちのやる気と自信をすごく高めた」といいます。

リーダーの積極的な動きで 全員参加の形につなげていく



3代目サークルリーダーの
木村英樹さん

現在、「やりとげる隊サークル」のリーダーは、土屋さんからバトンを受けた木村さんが務めています。話を聞くと、24時間勤務の交替制ということもあって、やはりチームワ

ークやコミュニケーションなどの面で苦勞しているようでした。

「最近、私もこの活動の楽しさをわかり始めてきたところです。ただ、参加できないメンバーにはQCサークルノートに気づいたことを書いてほしいとお願いしていますが、なかなか書いてくれない人もいます。そういう場合、現場に直接会いに行くこともあります。そうすると、けっこういい意見が出てきたりするんですよ」

メンバーの中で最年長の城崎さんは、こんなことを苦笑しながら語っていました。

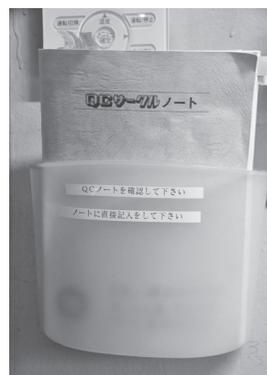
「最初はQCサークルなんて、正直いって面倒くさいと思っていました。だけど土屋さんも木村

さんも前向きで熱心だから、私もやらなくてはあかんと思うようになりました」

さらに、こんなコメントも。

「じつはIT日記があった頃は、次の配信が待ち遠しくなりましたね。この年齢だけど、私はけっこうパソコンが好きなんです。覚えたことを家に帰ってもう一度やり直し、それができた時がうれしくて」

さて今回、「やりとげる隊サークル」の会合に伺った時は、新たな活動が動き出して間もない頃で、現状分析まではひとまず終えて



詰所に置いてある「QCサークルノート」



入り口のドアには議事録やQC会合日、意見を寄せる目安箱を設置



メンバーの城崎憲次さん



↑ エクセディ本社入口の
守衛室



← 守衛室に設置している緊急
地震速報受信システム



↑ 緊急放送の模擬訓練をする
木村さん。毎日、この
訓練は続けているという

守衛室に掲示している地震→
発生時の緊急放送用資料



いる段階でした。そのテーマとは、「地震発生時の対応」。地震が発生した場合、本社構内に向けて緊急放送をする必要がありますが、そこに不安があるという声が複数あがったため取り上げることにしたそうです。

多くの要素が複雑に絡み合い 要因解析で試行錯誤中

サークルリーダーの木村さんの説明によれば、エクセディ本社の正面入口の守衛室に緊急地震速報システムがあり、地震発生を感知した時には構内放送をするのが基本ルール。震度4以下かどうかで、放送内容を2パターンに分けているといいます。ただ、テーマ選定後の現状把握の段階でメンバーから意見を

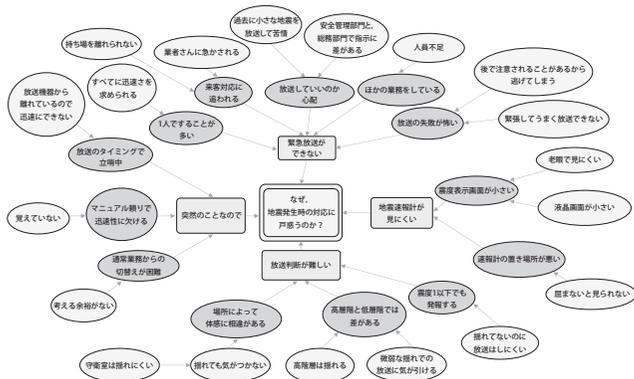
出してもらったところ、不安や戸惑いを感じているという声が続いてきました。

「緊急放送で失敗するのが怖いと感じている警備隊員が少なくありません。また震度1程度の微細な地震の場合、エクセディの方から“たいした揺れでもないのに、なぜ放送するのか”といった声が届くこともあります。そのような現場サイドの悩みもあって、テーマにしました」

取材でおじゃました時は、ひと通りの現状把握を踏まえ、問題点の要因解析に取り組んでいる段階。新QC七つ道具の一つである連関図法も活用し、原因と結果、目的と手段などが複雑に絡み合った現在の状況を整理し、要因解析に結びつけたいということでした。

ただし、話を聞けば聞くほど、対策立案につなげるのは容易ではないとも感じました。それは木村さんたちも同様のようです。

「我々も今回のテーマは難しいと思っています。震度の程度によって放送する際の言葉や声の出し方を工夫してはどうか、といった意見も出ています。いずれにしても、エクセディの担当の方とも相談し、サークルが一体となって何とかテーマ完結のゴールにたどり着きたいと考えています」
(取材・文 井上邦彦)



地震発生時の対応に関して、問題を整理するために作成した連関図